

春燈



8
月号

久保田万太郎の句

竹馬やいろはにほへとちりぢりに

『文芸春秋』所収大正十五年作

過去とその過去を踏まえた現在が、さながら芝居の場面のように心に迫りくる一句である。昔の場は万太郎の回想シーン（現在）となり眼裏に再現されるのである。或る芸能関係の人が「この竹馬の句以上のものに出合った事は無く又これを越える句は有り得ない。」と絶讃の辞を書いている。浅草神社（三社様）の境内にはこの竹馬の句碑が建っている。舞台が浅草である所以であろう。

片桐てい女

久保田万太郎の句

いまはなきおあいさんをおもふ

花曇かるく一ぜん食べにけり

句集『これやこの』昭和二十一年

艶なる一句である。而して深い喪失感に根を持つ一句である。その女人は吉原仲の町から、いく代と名乗って出ていた名妓で、師の生涯の思い人である。かるく一ぜん、という日常語のもつ淡い憂い。食べにけり、とさりげなく突っ放したような切れ。そして、今自分が生きていることの感触に暈のかかったような、不確かさの実感。そこには花曇という季語のエッセンスがみなぎる。

中村嵐楓子

西ヶ原日記 (三)

鈴木榮子

夏 暖 簾 複 式 簿 記 に 及 び け り
西 川 の 蚊 帳 も 近 江 の 産 な り け り
身 一 つ の 振 り 分 け 天 秤 水 鶏 鳴 く

近江兄弟社メンソレータムの日焼止め
夏旺む伊藤忠セシール近江人^{びと}
大内山の畏き辺り松の芯
昭和天皇の緑よ二の丸雑木林
歩き迷ひて不浄門とや夏落葉
海はもう見えぬ江戸城万緑中
羽柴越中寺の刻印石の青葉かな

孤老經

滝沢幸助

立春大吉こと皆遠くなりけり
朝敵の孫一揆の裔の残ん雪
仏は無慈悲神は嘘つき花は他人
偽らぬ者は死者のみ春の月
四月なほ雪降る村の転び耶蘇
白髪三千丈歴史認識てふ黄砂
親しむと見せて蚊柱せめぎ合ふ
泣く救ひ忘るる救ひ春の霜
春の星消ゆるさだめと悟るまで
春眠や惚は悲しみの麻酔薬

〈特別作品〉
〔抄〕

金鳳山平林寺

佐橋敏子

今年竹無一物とふ入山券
薫風や鐘撞く僧の袖の紺
実梅落つきのふにつづくけふの風
蛇蔣踏んで近づく在五塚
竹皮を脱ぐ竹林の奥の風
あめんばう影かるがると放生池
塔頭の和尚不在の茂りかな
まつすぐな雨や青葉の坐禅堂
経蔵の風雨歳々虫払ひ
野火止に多摩の水音蜚の火

当月集

鈴木 榮子選



○ 荻野嘉代子

滴りや嗣治の「裸婦」透けるほど

校庭に異国の一人裸足なる(藤田嗣治展)

思川指染めて食ふ桑苧

雨乞や木仏つくづく身を削り

軍星負ひし光秀五月闇

○ 生方義紹

コラーゲン錠数ふれば夏めきぬ

たかなや大和撫子の割烹着

伽羅路や言葉少なの子の酌める

柿の花赤い頭の小町針

衰ふるも亦一興や心太

○ 佐渡谷秀一

日本丸の総帆展帆夏来たる

目つむれば五月の風や色あをく

ほつほつと豆囀む音の青時雨

朝刊の文字騒がしく梅雨に入る

観覧車ぐらりと天へ梅雨の蝶

○ 篠原幸子

薔薇アーチ声音やさしき老婦人

藤田嗣治の細き描線青時雨

憂ひなく平らに開く鉄線花

御文庫の紙魚の出入りも許されず

真の闇なくて眠れぬ黄金虫

春燈の句

鈴木 榮子選

炎天や古刹の庭の西遊記

カナダ 廖 運藩

百人番所老鶯声を正しけり

遠雷や産婆稼業の地獄耳

筍の煮ゆるひととき夕厨

風薫る煉瓦くぼみし煉瓦道

身構へのいらぬ齡や葱坊主

苺摘む素人農夫の痩せ柵田

パセリ摘み朝のポタージュみどりの日

ガリバーの子が踏み入るよ蝌蚪の国

東京 久米 憲子

夏は来ぬ一指をふれて見るピアノ

夏帽子かぶり直して大手門

夏の雲降り瓦の鐘馗文

東京 宮田 豊子

葭切の大きく揺らす手漕ぎ船

近江人のもてなし上手麦湯釜

白日傘まはしたねやの栗饅頭

馬つなぐ環の赤錆麦の秋

薔薇に刺うかと誘ひに乗りけるよ

兵庫 伊藤 百江

鯉に乗る小幡人形走り梅雨

孵りけり軒端にぎはす燕の子

水蓮の一鉢目高育ちけり

兵庫 福地 淳祐

雨の路ことさら青く茹であがり

花糲散策圏に人見えす

あめんぼつひに己が水輪を抜けきれず

挨拶はよく降りますね梅雨滂沱

セントバーナードまだ子犬とよ青嵐

東京 宮沢 治子

水底の影も走りぬあめんぼう

父の日や父描く目鼻散らばして

母の日や明治生まれの母ありて

兵庫 尾崎 貞

さくらんぼ宝石箱に仕舞ひたし

病む母のシルバーカーや夏帽子



余言

鈴木 榮子

御文庫の紙魚の出入りも許されず
篠原 幸子

六月の東京吟行会は皇居東御苑に行った。会の吟行地として前に行ったことがあったようだったが、とにかく近くでという私の願いを聞いて頂いている。

東御苑を国民に解放して下さってよかったですと思う。

御苑のみどりとその歴史の道を辿ると江戸城の広さ、城と謂うもののがかりな警固は百人番所にも伺えた。

御文庫は東御苑のどこかにあつたのであろうが、この堅固の中で紙魚の出入りも許されず、は実感である。

歴史の重みの中で例え入り込んだ紙魚も飽食の果てに死んでしまったであろう。

散々暑い中を歩き回り、なんとしたことか竹橋へ出るのに平川不浄門を出ることになった。絵島生島は虚か実か、余り疑わぬ質だが仕組まれたことであらうと思つた。

蜜豆の寒天に角ありにけり
横田 初美

蜜豆は女性の好む甘味嗜好品である。現在は蜜豆がレベルアップされて果物、アイスクリーム、三色の求肥等々色々なものを乗せてある。そしてその土台となっているのがシロップと賽の目切りの寒天である。

寒天を小さな四方形に切ると角々にツノが出来る。

角があつたとて口中でささる訳でもないし、噛み砕くほどの抵抗もない。プリンプリンして女性の好むものではあるが寒天の角はお豆腐の角と違って簡単には崩れない。

これを書くに当り心太を食べて見た。ところてんの整列して突き出されたうねりを口中にすると多少の角の抵抗はあつた。

何だか新鮮な気持で心太の稜を飲込んだ。

前にこの口中の許せる暴れ者を二・三秒楽しんだことを思つた。こういう感触を俳句的だと思ふのだが。

角はあつても自己主張はない。(以下略)